'99 —1・2

北海道民族学会通信

北海道民族学会
〒004-0006札幌市厚別区厚別町小野幌53-2
北海道開拓記念館　出利葉浩司　気付
Tel(011)898-0456 Fax(011)898-2657　e-mail QWB01760@nifty.ne.jp

題　字：椿坂小籬(點の会所属)
編　集：出利葉浩司
発行者：谷本一之
印刷所：㈱北海道機関紙印刷所

ウラルでの調査を終えて

北海道民族学会
会長　谷本　一之*

3月にバシキルに、5月にはハント・マンシースクに行ってきました。バシキルは日本の追分タイプの旋律と深い関係があるとされている〝ウズンキ〟(長歌)、ハント・マンシースクはアイヌと並んで有名な〝熊送り〟の調査でした。西シベリア、ウラル山脈の周辺地域は、ロシアは当然の事ですがもっぱらフィンランドやハンガリーの研究者の研究領域でした。現在でも両国からの何人もの長期滞在の研究者が現地調査に従事しています。私にとってこの地域の調査は2度目、3度目ですのでフィールド以外の様子もすこしは調べる余裕も今回は出てきていました。

とくにハント・マンシースクで印象的だったのは研究活動の新しい動向でした。それまでのロシア人を主体にした科学アカデミー系の研究組織とは別に、ハント族やマンシー族を主体にした研究組織が活発に活動をはじめていることでした。ただ、管区名は一緒なのに研究組織はハントとマンシーが別々なのはちょっと奇異に感じました。あまりお互いに協調的ではないと聴きましたが、その歴史的な背景まではつかみきれませんでした。

いずれにしろ、ハント族の研究者が中心の研究所では、伝統文化の研究資料の収集、研究者の養成に力を入れているようでしたが、そのためにも体系的な現地調査の必要性を痛感すると同時に、それがなかなか出来ないことをなげいていました。もちろん予算がないからです。給料の遅配ももちろんだが、研究のための予算がないのがつらいということでした。研究者仲間として私にも何か出来ることはないかと考えているところです。

このハント族の〝熊送り〟の芸能を演ずるグループが10月に来道することになりました。文化庁が主催する〝国際民族芸能祭〟に参加するためです。アイヌの熊送りとの比較を目前に出来る日を楽しみにしています。

*たにもと・かずゆき
北海道立アイヌ民族文化研究センター　所長

1999(平成11)年度北海道民族学会第1回研究大会発表要旨――○
(1999年6月19日(土) 於；北海道開拓記念館講堂)

モンゴル族の夏の食に関する栄養学的検討

石井 智美*

現在も内陸アジアで伝統的な遊牧生活を営むモンゴルは、ヤギ、ヒツジ、ウシ、ウマ、ラクダといった家畜を、生活地域の草の植生にあわせて飼っている。その食生活は自給自足を原則とし、家畜由来の乳と肉に大きく依存しているといわれている。しかし、何をどれくらい食べているのかについてこれまで報告はなされてはいなかった。モンゴルは独自の乳加工体系を持つ。その加工による乳製品をキイワードとして食を検討することで、モンゴルとは何かを考える新たな視点が生まれるのではないかと考えた。

調査は1997年、モンゴル国の首都ウランバートルから南西350kmに位置するウブルハンガイ県ブルド草原で行った。夫婦と未婚の子供2人の典型的な遊牧民宅に2週間滞在し、各自が食べた品目とその重量を記録した。帰国後各試料を常法に従って一般成分分析を行い、エネルギー量を算出した。朝食は塩の入った乳茶と自家製乳製品。夕食は小麦粉を使った温かい料理といった1日2食である。日中約15時間は適宜乳茶と乳製品で過ごしていた。毎日の喫食品目数は平均9品目で、そのうち5品目が乳製品であった。毎日、同じ食べ物が繰り返し出されていた。現在日本の『栄養のバランスを取るため1日30品目の食品を目標に』という厚生省の食生活指針が、豊かな食材を前提としているのに対し、モンゴルは対極的な食生活である。

成人男子(世帯主)の1日のエネルギー摂取量は、平均2200kcal(標準偏差 588.94、変動係数 0.27)であった。この値は、一見少なくはないが、モータリゼーションに組み込まれた日本とは異なる草原の暮らしにおいては、エネルギー的に余裕無き平衡状態である。このエネルギー量の47.6%が乳製品から摂られていた。炭水化物である小麦粉は23.5%、肉類は23.8%であった。栄養学的にも興味深い特色として、朝食後から夕食までの日中約15時間のうち、馬乳酒を飲んだ総計が、エネルギーとして算出されるのである。調査先の世帯主は平均3ℓの馬乳酒を飲んでいた。1ℓ約400kcalの馬乳酒は、その飲用で1200kcal摂取されたことになる。馬乳酒が夏のエネルギー摂取量に大きく関わっていたことが明らかになり、馬乳酒は、栄養学的にも重要な意味を持つ乳製品である。『モンゴルは夏に馬乳酒だけを飲んで過ごす』という報告の裏付けともなった。

小麦粉は1人当たり1日100g消費されていた。粉という形態は移動を前提とした遊牧生活で運びやすく、加工、保存が容易であり、エネルギー源としても望ましかったことから取り入れられたといえよう。草原における食物としての歴史は、小麦と麺を示す言葉が共に「ゴリル」であることから比較的新しいと考えた。自給出来ない小麦が欠かせない存在になっていた。そして野菜を摂らない遊牧民の食において「食物繊維」を広義に難消化性物質と捉えると、家畜の内臓を始めとする肉の全体食によって、筋、皮、膜といった難消化性多糖類、蛋白質の一種であるコラーゲンや、乳製品中の乳糖が、その代役を果たしていたのである。ビタミンCは、家畜の内臓、血液の利用と共に夏季は、馬乳酒の飲用によって確保されていた。このように現在のモンゴルの食は、乳、肉といった家畜由来の恵の機能性を充分に生かしたところに、小麦粉が加えられた形態であった。

*いしい・さとみ
光塩学園女子短期大学 食物栄養科(〒005-0012 札幌市南区真駒内上町3丁目1－1／Tel.011-581-0121 Fax.011-583-6982
e-mail s-ishii@wine.plala.or.jp)

1999(平成11)年度北海道民族学会第1回研究大会発表要旨

(1999年6月19日(土)　於；北海道開拓記念館講堂)

サモアの生活誌—食生活を中心に—

横山　悦子*

筆者は、1992年に青年海外協力隊員として、サモアに派遣され、その経験からサモアの生活実態に対する関心が高まり、食生活教育の興味から、食生活の観点で調査を行った。

サモアの概要及び、食料事情、栄養事情について文献を中心とした調査を行い、食生活の実態を知るために、サモアでの食事調査を行った。

食生活の実態を知るための調査は、ウポル島、マリエ村で行った。調査期間は1998年9月29日～11月8日の41日間である。調査期間中は、村内の商店を経営するサフィティ家に滞在し、間食を含む食事184食について献立、使用される食品名、食品の入手法と入手経路を記録し、分析した。

1．サモアの概要

サモアは、南太平洋のほぼ中央に位置し、気候は熱帯である。人口は214,384（1996年6月）である。サモアは、南太平洋地域では最も賃金が安く、失業率が高い。1991～1992年のサイクロン被害は深刻なもので、現在も復興の途上にある。

サモアは根栽農耕文化で、生産性は低いが、必要に応じた栽培法により生産の安定性は高い。

2．食料・栄養事情

1984年の調査では、国内生産の食料から得られるエネルギーは、摂取エネルギーの70%である。国内での食料生産量は減少している。これは、サイクロン、タロイモ葉枯れ病、アフリカマイマイの繁殖、労働者の他地域への移動などによるものである。現在の主要食料はターム一イモ、バナナ、パンノキ果実などである。タンパク資源としては、魚介類、肉類、鶏卵が利用される。自然災害のため、漁獲は減少している。

食料輸入額はサモアの輸出総額を超える。輸入される食料の主なものは、マトンフラップや小麦粉、砂糖、米などである。これらの食品は炭水化物、又は脂肪を高率に含み、ビタミンや無機質の含有量は少ない。現在は、自然災害のため、国内での食料生産が不十分であり、輸入食料の摂取は増加している。こうしたことは、肥満、糖尿病、心疾患をひき起こす要因となっている。

3．実態調査

食品はサモアでの食生活教育に使われている3つの食品群に分類し、出現頻度を分析した。

1群（野菜・果物類）は、出現頻度が5.54／日と低い。これは、従来のサモアの食習慣の中に野菜を利用することが少なかったことと関連している。2群（肉類・魚介類・乳製品・卵）は、輸入品の出現頻度が高い。その主なものはマトンフラップである。これは、南太平洋地域では一般的に利用される食品で脂肪を高率に含む。魚介類は、マトンラップに次いで出現頻度が高い。3群（主食・砂糖・菓子類・脂肪）については、主食の分析を行う。従来の研究によると、主食はタロイモであるが、現在では入手が困難であるため、出現頻度は低い。出現頻度の高い食品は、バナナ、小麦粉、パンノキ果実、米であった。

サモアでは、生活習慣病の増加が、健康問題として深刻である。サモアでの栄養素摂取は、ビタミンと無機質が不足の傾向にある。主食としてのイモ類の摂取が減少していることが、その主な原因として考えられる。

現在のサモアでの食生活は、輸入された食品に大きく依存している。特に出現頻度の高いものでは、かつての宗主国ニュージーランドから、飼料用のマトンフラップを食品として輸入している。これはサモアの食習慣を変えてしまうほど、食生活に深く入り込んでいる。

*よこやま・えつこ
北海道教育大学大学院札幌・岩見沢校　平成10年度修了（〒001-0906　札幌市北区新琴似6条1丁目3番2号）

1999(平成11)年度北海道民族学会第1回研究大会発表要旨

(1999年6月19日(土) 於；北海道開拓記念館講堂)

ユートピアの危機と変容—中西部イスラエルにおけるキブツ・フルダの生活史を通して—

西田麻衣子*

共同・平等という価値理念を基として1910年に創設されたキブツは、今日、市場主義経済への移行に伴なって、イデオロギーの共有が困難となり、一体感の喪失と利害葛藤の顕在化という新たな危機に直面している。本稿では、キブツの社会変容の過程を(1)形成期(2)安定期(3)再構築期の三つの段階に分けて、形成要因・コミュニティ・集団形成・支援体制・人口流動性・意識特性という6つの項目について考察した。とりわけ第3期の危機の諸相に記述の焦点を合わせた。

形成期のキブツは、主に思想によって繋がったコミューン志向のコミュニティであった。パイオニア精神で移住した若者たちの流動性は高く、外の社会からは特殊な集団と見られ、アラブ人からの攻撃もあったことから自己防衛手段を取らざるをえず、孤立化の傾向にあった。イスラエル建国直後のキブツは国をあげて経済的にも支援され、コミュニティの形態を従来の思想的なものから生活基盤へと変容させ、共同意識の形成や集団規模の拡大が進みコミュニティは安定期に入った。安定期のキブツが危機に陥ったのは1980年代で、右翼政党の政治的支配による経済的支援の消滅と、イスラエル国内のインフレーション進展と株価の大暴落による。

これらを克服するために、経済的基盤を確保することが求められ共同体の再構築を試みることとなった。その一つとして、メンバー以外の居住者がキブツ内に住むようになったという変化がある。市場主義経済の浸透、それによるキブツ理念の風化とともに、キブツは利害関心の分立化が進み危機的状況に陥っているといえる。今日のキブツは多様な変化の状況に置かれており、経済状況と人口の安定性からみて原形型から変革型まで多元化している。将来的にキブツが再構築化を図っていくためには、流動人口の定着化と生活の安定が課題となると考える。

本研究の調査対象はキブツのなかでも8番目に建設されたイスラエル中西部のキブツ・フルダである。調査期間は1998年7月26日から9月24日までである。分析にあたってはナショナル・キブツ・ムーブメント公文書館及びテル・アビブ大学社会科学部図書館の文献も活用した。

キブツ(フルダ)の変容過程

時期 / 項目	1909 形成期	1950 安定期	1985 再構築期
形成要因	自給自足型農業・孤立化	工業の派生	流通経済型産業・市場主義経済の浸透
コミュニティ	コミューン指向	コミュニティ利害の共同化	コミュニティ利害の分化
集団形成	単身移住・成員同居	集団規模の拡大・共有施設による共同意識の形成	緩やかに開かれた地域集団
支援体制	なし	イスラエルによる支援	イスラエルによる支援の消滅
人口流動性	キブツ外社会への流動性が高い	キブツ間の流動性が高まる	キブツ外の移住(集団規模の移動傾向)
意識特性	冒険的・革命的	目的達成感	安全な生活に対する自信の喪失・キブツ理念の風化

1948年 イスラエル建国
1977年 右翼政党による政治的支配
1985年 急激なインフレーション・株価の暴落

*にしだ・まいこ
札幌国際大学大学院 平成11年度修了 (e-mail maikosajana@pop06.odn.ne.jp)

1999(平成11)年度北海道民族学会第1回研究大会発表要旨
(1999年6月19日(土)　於；北海道開拓記念館講堂)

日本人ムスリマのヴェール

西尾　ふみ*

日本人女性のイスラームへの改宗者は、異教徒との結婚を制限するイスラーム法も手伝い、1980年代後半から増加傾向にある。そのなかでも、筆者が1998年に聞き取り調査を行った二十人ほどの女性イスラーム教徒（以下、ムスリマと記す）たちにおけるヴェール受容は、小集団における象徴の活性化の様相を示しており興味深い。

彼女たちは、ムスリマとして自らをアイデンティファイする人々の中でも、ヴェールを着けたりイスラームの勉強会などにたびたび参加したりするという点で、少数派だが目立つ存在である。ほとんどは特定のムスリマとの結婚を考え始めてから改宗している。外国人の夫を持つという共通点もあり、情報交換をしばしばする緩やかなネットワークを形成している。特定のイスラーム法学派を支持するという意識は薄く、むしろそのような違いを無化しようとさえする。一人を除いた全員が改宗時につけるアラビア語の名前で互いを呼び合う。

彼女たちがヴェールを着けるときは、三角形あるいは半円形の布を使う。額の上でタックをよせて顔のラインに沿わせ、耳は出さず、あご下をピンやクリップで留める。長さは胸までが多く小さめである。これはイスラーム主義的な都市の中間層の女性たちの間で世界的に顕在化してきた、地域色の薄いスタイルと同様の形である。そのようなヴェールは、外国で買ったり、ムスリマ仲間からみやげに貰ったりして入手される。

日本でヴェールを着用するか否かについて、夫や夫の家族の干渉はほとんどないか、または意識されていない。また夫の出身地が都市か農村かということに、着用するヴェールの形はそれほど影響を受けない。夫の実家を訪れた時には実家の指示通りのものを身につけているのとは対照的である。

これはイスラームと地域的な慣習とを区別しながらイスラーム的服装を定義し直す行動にも繋がっている。ヴェール姿のありようを決めるのは夫のアドバイスではなく、むしろ本やムスリマ仲間から教えられた外国でのムスリマの服装のうち、とくにイスラーム復興に共鳴する都市の女性たちの姿である。マレーシアの大学生のヴェール姿などが意識されている。いっぽう、外国のムスリマたちが着けているもので透けるものなどは、「民族衣装に過ぎなく、イスラーム的ではない」とされる。半袖とヴェールの組み合わせの「中途半端さ」も、批判の対象となる。

ムスリマ同士の集まりの場でのみヴェールを着け、公の場で外すことは珍しくない。これは集合場所のモスクを宗教的な場として特別に扱っていることとも関連しているのだが、身内以外の男性に対する慎みを表すというヴェールの意義は、口頭で説明される割に実現していないことは確かだ。「中途半端」なヴェール姿への批判は、頭部を覆うヴェールが特別な象徴とみなされているゆえとも考えられる。また、職場などにおいては調和重視の倫理的指向に挑戦しなければならないということも障害となっている。困難さにもめげずヴェールを公的な場で着けるムスリマは賞賛され、その行動は預言者ムハンマドが異教徒の迫害に遭った故事になぞらえられることもある。

このような宗教的純粋さへの志向は、日本におけるキリスト教、特に無教会派の発展の仕方を想起させる。ヴィクター・ターナーの「コムニタス」的なこの集団は、未組織ながらもダイナミクスを秘めた存在だといえるだろう。

*にしお・ふみ
北海道大学大学院　文学研究科　文化人類学専攻博士課程1年（〒060-0808　札幌市北区北8条西5丁目
北海道大学古河講堂101／Tel&Fax. 011-706-3223（直通）e-mail redchilli01@hotmail.com）

1999(平成11)年度北海道民族学会第2回研究大会発表要旨
(2000年1月30日(日) 於；北海道開拓記念館講堂)

日本の実証的エスニック・スタディーズにおける〈呼称〉をめぐる三つの問題

宮内 洋*

本報告はエスニシティ研究におけるきわめて素朴な一つの問題提起である。つまり、一つのエスニック・グループと見なされている集団に対して、その「当事者」ではないと自覚する研究者一人ひとりがどのような総称を用いるのかという問題に関して、報告者自身のこれまでのフィールドワークの経験に即しながら考察を試みるものである。具体的な対面的相互作用場面を含む調査研究のプロセスを念頭に置きながら、時系列的に検討していくと、その大きな問題から(1)〈呼称〉の選択、(2)〈呼称〉の揺れ、(3)〈呼称〉の更新という三つの分節化された問題群が浮かび上がってくる。これら三つの問題とは、具体的には、以下の通りである。

(1)〈呼称〉の選択の問題

まず、「対象」であると私たちが一方的に目している人たちとの出会いを、フィールドワークにおいて実際に経験する以前の問題である。ある一つのエスニック・グループと見なされている集団に対して幾つもの〈呼称〉がすでに存在している場合、そこにはどの〈呼称〉を選ぶのかという問題が存在している。そして、その〈呼称〉を選択するという行為は、自らのこれまでの体験が色濃く刻み込まれた認識枠組に基づいて行われた、きわめて「政治的な行為」であると指摘できよう。

(2)〈呼称〉の揺れの問題

次に、調査のプロセスで「当事者」であると目される人たちに実際に出会った後の問題である。私たちが用いていた〈呼称〉、さらにはすでに存在している〈呼称〉は、"出会い"という経験をくぐり抜けた私たちにとって、その面前にいた人たちのことを表したものとして果たして妥当なのだろうか。私たちの心中で揺らぎ続ける、きわめてデリケートな問題がここに存在している。

(3)〈呼称〉の更新の問題

既存の〈呼称〉に対してある種の違和感を抱いた私たちは、眼前にいた人たちとさらに真摯に対峙する試みを行い始めるかもしれない。つまり、実情とはそぐわないと感じられる既存の〈呼称〉に寄りかかることから身を引き離し、研究成果を忠実に反映させた〈呼称〉を模索する可能性を熟考し始めるのである。

本報告では、〈呼称〉をめぐる以上の三つの問題を抽出した上で、それぞれにおいて具体的に説明を試みた。最後に、これらの〈呼称〉をめぐる問題には結論が出ないことを指摘しておかねばならない。つまり、「対象」の吟味をいくら入念に行なったからといって、最終的に〈正しい呼称〉が導き出されはしないのである。それは、エスニシティにまつわる〈呼称〉は当該時点における〈呼ぶ者〉と〈呼ばれる者〉との関係性が色濃く反映されているからである。〈呼ぶ者〉自身の内面化された社会認識の枠組自体も同時に問われるべき対象であり、それは私たち自身の分析も必要としていることを意味している。

[参考文献]

宮内 洋 1998「外国籍園児のカテゴリー化実践」、山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロジーの想像力』、せりか書房、187 - 202.

宮内 洋 1999「私はあなた方のことをどのように呼べば良いのだろうか？ 在日韓国・朝鮮人？ 在日朝鮮人？ 在日コリアン？ それとも？ —日本のエスニシティ研究における〈呼称〉をめぐるアポリア—」、在日朝鮮人研究会編『コリアン・マイノリティ研究』第3号、新幹社、5 -28.

*みやうち・ひろし
日本学術振興会特別研究員 北海道大学教育学部附属乳幼児発達臨床センター (Tel&Fax011 - 741 - 3350)

1999(平成11)年度北海道民族学会第2回研究大会発表要旨

(2000年1月30日(日)　於；北海道開拓記念館講堂)

農業生産と日本人としてのアイデンティティ—南部パラグアイ日本人移住地の事例から—

野口　明広*

南部パラグアイへは、第二次世界大戦後、多くの日本人移住者が入植し、熱帯林の開拓に取り組んだ。開拓には大きな困難がともなったが、移住者は、今日では農業機械を導入し、大豆と小麦の二毛作による畑作農業を大規模に営んでいる。彼らは「日本人」としてのアイデンティティを強く保持しており、大豆と小麦がパラグアイ農業の基幹作物として成長していく過程で貢献しえたことを誇りとしている。本発表では、移住者がアイデンティティを表明する際に、彼らの作物にそれを託しており、農業生産を通じてのパラグアイ社会への貢献を強調している点を示した。

本発表は、1992年から1996年までにパラグアイで断続的に行った文献収集と現地調査で得た知見に基づいている。1996年の調査は1995年度(前期)松下国際財団研究助成（題目：パラグアイの近代化と日本人移住地の成立—資本主義化・民主化における日本人移住の影響—）を受けた。

南部パラグアイのイタプア県には日本人移住者が入植したチャベス移住地・ラパス移住地・ピラポ移住地がある。移住地は消費地から遠く離れていたため、入植当初には作物の販売に困難が多かった。大豆も、当初から移住地の自然条件に適していることがわかったが、販売先を見つけることはできなかった。そこで、1959年に日本へ農協組織の役員を派遣して大豆の輸出契約を結んだ。これがパラグアイの大豆輸出の草分けとなった。1970年代には、国際市況の高騰やパラグアイの大豆増産政策の影響から、移住者は大型機械を導入しての大豆生産に乗り出した。しかし、これが過剰投資となり、農業経営を圧迫した。その対策としては移住者は1970年代末には大豆の裏作として小麦生産に取り組んだ。亜熱帯にあり流通網の整っていなかったパラグアイでは、小麦の栽培や販売は容易ではなかったが、困難を克服し、今日では大豆と小麦の二毛作による大規模な畑作農業を営むにいたっている。

こうして生産されるようになった大豆や小麦は、今日では移住者の「日本人」としてのアイデンティティを表明する重要な要素となっている。本発表では、日本で刊行された雑誌記事（石堂徹生著「戦後秘話　農林10号の悲しき栄光の旅路」『地上』家の光協会　1993年8月号9月号10月号連載）と、この内容と移住者の小麦生産との関係を示すためにラパス移住地の農協の内報に掲載された記事（野中孝之著「半ワイ性多収穫形小麦のルーツ」『農協だより』第101号　ラパス農業協同組合　1994年10月5日発行）とを比較し、次の二点を示した。①日本人移住者がパラグアイで栽培する小麦の品種は、日本で開発されパラグアイをはじめ世界の小麦生産に貢献した品種の血統を引いていることを、石堂氏の記事などを通じて移住者が認識したこと。②日本で開発された品種の血統がパラグアイの小麦生産に貢献しているのと同様に、移住者はこの血統をひく小麦の栽培を通じてパラグアイ社会に貢献していることを再認識し、「日本人」として誇らしく感じていること。

このような「日本人」としてのアイデンティティは、単に日本からの伝統や文化を継承していることによるのでもなければ、政治的脈絡のなかで帰属するエスニック集団の名前を戦略的に名乗っているのでもないのである。彼らの「日本人」としてのアイデンティティは、パラグアイの大地を切り開き、農産物を栽培し販売してきたという開拓の歴史と密接に結びついており、農業者としての生活の基盤と深く関わるものなのである。

*のぐち・あきひろ
北海道大学大学院　文学研究科研究生（〒047-0152　小樽市新光4—22—9／Tel. 0134-54-5197）

北海道民族学会1999(平成11)年度の事業

北海道民族学会では、二回の研究大会を北海道開拓記念館講堂でおこないました。ここでの発表については、本ニュースレターに概要を掲載しています。とくに第一回大会は、若手の研究者の発表の場となりました。修士論文の発表が3本あり、かねてより懸案であった修士論文発表会が、期せずして？実現されました。

学会では、今後とも若い研究者の発表を歓迎していきたいと思います。

また、帯広大谷短期大学との共催で同短期大学を会場に特別研究大会を開催いたしました。このほか、二つの共催講演会をおこなっています。これらのプログラムは以下のとおりです。

◉北海道民族学会「特別研究大会」

Special Meeting at TOKACHI 2000

日時：2000年3月25日(土)午後1時～5時30分
場所：帯広大谷短期大学
主催：北海道民族学会・帯広大谷短期大学
第一セッション「北方の民族誌—伝統と再生—」
発表者　中田　篤（北海道立北方民族博物館）
　　岡庭　義行（帯広大谷短期大学）
コメンテーター　百瀬　響
　　（北海道教育大学岩見沢校）
司　会　高木　昭作（帯広大谷短期大学）
第二セッション「民族文化のなかの博物館」
発表者　内田　祐一（帯広百年記念館）
　　川上　淳（根室市博物館準備室）
コメンテーター　岡庭　義行
　　（帯広大谷短期大学）
司会　手塚　薫（北海道開拓記念館）

◉講演会

「東南アラスカ先住民文化の伝統と近代化」

講師：プリシラ・ショルティー教授
　　（アラスカ大学　ケチカン校）
日時：7月26日(月)午後6時より8時
場所：北海学園大学大学院棟
主催：北海道民族学会・北海学園大学人文学部
通訳：岩崎まさみ（北海学園大学助教授）

ショルティー教授は、東南アラスカ先住民文化の第一線の研究者で、今回は平成11年度文部省科学研究費（基盤研究B：研究代表者　岡田淳子）の共同研究者として来日されたのを機会に、ご講演いただきました。

◉講演会

「生ける極北
—スミソニアンの北方民族調査から—」

講師：イーゴル・クルーブニク博士
日時：10月25日(月)午後6時より8時まで
場所：かでる2・7視聴覚室
主催：北海道民族学会
通訳：高宮　広士（札幌大学助教授）

北海道大学スラブ研究センターの招きでスミソニアン自然史博物館のイーゴル・クルーブニク博士が来道されました。これを機に北海道民族学会では講演会を開催いたしました。クルーブニク博士はアジアおよびセントローレンスエスキモー研究の第一人者ですが、最近は北西シベリアの調査も精力的になさっておられます。スミソニアン研究者がおこなってきた極北先住民に関する調査や諸活動についてお話をしてくださいました。

◉おしらせ

長い間、北海道民族学会の運営委員としてご活躍くださいました足立明北海道大学教授が、4月1日付で京都大学へと転出されました。